

ン (Latin) のそれとは互に争ひをかましたり。ラテンの基督敎徒は舊來の基督敎を墨守せんとし毫も將來云々のことについては考ふるところなし。之に反して、サキソン派のものは大いに基督敎の將來及び未來永劫のことを主張して、いたく改革の必要をとなへたり。サキソン人が羅馬反抗の勢はこれ亦恐ろしき有様にして、殆んどあたるべからざる勢なり。北方ゲルマン人 (German) はサキソン人 (Saxons) 及びブリテンのアングル人 (Angles of Britain) と素と同部族より出でたるものなり。既に述べたるかのウイクリフ (Wiclif) とルーテル (Luther) とは素と同じチユートニツク族 (Teutonic) の出身にして正義と自由とを以つて共に其の主義とするところなりき。ブリテン即ち英國に於けるかのノルマン (北人) コンクエヌスト (勝利者) は即ち政治上の征服者なるが其の後に於ける精神界の征服者は即ち此のサキソン人 (Saxons) そのものなりとす。近代英國が其の宗敎上の點に於いて又自由の思想の點に於いて悉く勝利を制せし所以は一つに此のチユートン部族 (Teutonic) の功に歸せざる可からざるなり。而して近世社會の進歩發達に於いて殊にその精神界を支配する事業に於いてラテン族

サキソン人

(Latin) は著しくサキソン (Saxon) 人の後に出づる模様なり。げにや今日世界の覇者たるものがサキソン種に出でたるに反しラテン民族に屬する方の南米諸國、メキシコ、西班牙、伊太利の如き邦國が何れもその宗敎的方面に於いて慘澹たるものあるは争ふ可からざる事實なりとす。樹はその成る果實によりてその良非を判斷し得るのならひ、吾人はラテン族の基督敎徒がサキソンのそれに比して頗る遜色あるを認めずんばあらず、以つて近代に於ける世界宗敎界發達の名譽がむしろ此のサキソン族にあることを認むるなり。

次ぎに吾人は久しく氣運の熟し來たりし宗敎改革のことに就いて述べんとするに先だち、改革の到來を一層早めたる一著大事實について單簡に述べるところあるべし。そは主として智的進歩の結果として現はれたる現象にして文學の復興 (Revival of literature) 即ちこれなり。普通にはフマニツム (Humanism) の名稱にて知られたるもの即ちこれなり。この研究は從來歐洲の諸大學、學者仲間、に於いて久しく行はれたりし神學原理の研究とは違ひ、之をはなれて純粹に人類及び文學をその研究の對學とする學派なり。此の學派は希臘、羅甸の古典

フマニツムの學派

學者によりて大いに稱道せられたり。されば今日に於いても希臘羅甸の文學語學の研究は往々にしてフマニチース(The Humanities)と稱へらるゝことあり。スコットランド(Scotland)及び英國の大學に於いて殊にその稱呼あり。

紀元一四五三年コンスタンチノーブル(Constantinople)が土耳其人の手によりて覆されて以來、羅馬、フローレンス(Florence)シエンナ(Siena)の町は希臘の學者の集散するところとなり。希臘在來の古典の書庫は多くかれ等と共に羅馬方面に運ばれたり。既にコンスタンチノーブル没落以前より希臘の學者たちは早くも伊太利半島に入り來りしもの多かりしかばかれ等と伊太利人との間には大いに親密なるものありたり。當時希臘の學者文學者にして伊太利半島に現れたるものは左の如き人を以つて主なるものとなす。

- ジョージ(George of Trapezium)
- セオドール・ガザ(Theodore Gaza)
- ジョージン・アルシルピウス(John Argyropylus)
- コンスタンチン・ラスカリス(Constantine Lascaris)

ラテンの古典復興

デメトリウス、チャルコデラス(Demetrius Chalkondylas) エマニエル・モシヨビルス(Emanuel Moschopoulos) これ等の學者によりて詩歌、辯説、技術、哲學などの諸學は明白に確認せらるゝに至れり。

希臘の學術復興に伴ふて其の刺戟をうけ羅馬ラテンの古典學は復活したり。むしろ希臘に對する嫉妬より起りし現象の觀あり。それ故伊太利半島の學者の苦心は大いにつとむるところあるが如く、殊にオーガスタス時代(Augustus Aeg.)の全盛を再演せしむ可く腐心せり。その學者の名を次の如きものとなす。

- ガスパリヌス(Gasperinus)
- ジョーン・オーリスパ(John Aurispa)
- ガウリヌス(Guarinus Poggius)
- ポギウス(Poggius)
- ラウレンシウス・ヴァルラ(Laurentius Valla)

ニコラス・ペロセス(Nicholas Perthes)  
 クリストファー・ラウデヌス(Christopher Landinus)

而して伊太利亞の法王は此れ等ラテン學者に對して又先に擧げたる希臘學者に對しても共に一樣に學術復興の趣きを讃し居たり。

紀元一四二九年より一四九二年に至る間にはフロレンス(Florence)のメヂチ(Medici)は當時の最も有名なる學者を招聘して古典科學、文藝の各専門的研究に大いなる恩典を與へたり。かくて伊太利は近代に於ける最も優麗なる世界文學の中心となれり。これ等メヂチアンの學派中よりかの若き天才ラファエル(Raphael)の如きものを傑出するに至れり。

さてフマニヅムが宗教的方面と如何なる關係を持するかと云ふに、伊太利に於ける此等學者は基督教に對して頗る冷淡なりしのみならず、寧ろ積極的に敵意を挟み居たり。當時の學者が神學的方面の空理を脱却して文學と人類そのものの研究に傾くに至りしものなることは已に述べたるが如し。かくて、時代の思潮として聖書(Scripture, Bible)の神學的方面を云々することは次第に遮げら

フマニヅムと  
 宗教

るゝ至れり。否當時の學者には基督教の天帝起源などの説に對しては多く沈黙をまもりて云々せざるものさへあるに至れり。要するに基督そのものが物語的となり、信仰せられざるものとはなれり十五世紀に於ける伊太利のフマニヅムに於いて基督教は頗る怪訝視せらるゝに至りしものなり。

然るに伊太利以外の諸地方に於いてはフマニヅム(Humanism)は福音傳道と共に次第にひろく傳播せり。例へばアルプス北部地方(North of Alps)に於ては古典言語の研究傑作の研究などは非常なる勢を以つてひろまりぬ。されどかゝる研究はがやがては變じて神學的且つ宗教的の觀察の媒介となり手懸りとなり遂には在來の宗教の研究よりして更らに引いては宗教改革(Reformation)の氣運を一層早からしむる導火線ともなれり。而してパイプルの研究の如き確かに一新面目をひらきて哲學復興の新生命を以つて觀察せらるゝに至れり。紀元一四六二年より一五〇〇年の間に至る四十年間にはラテン語の聖書(Latin Bible)の續々出版せられて此の期間には一百版を重ねるに至りし程なりき。古典聖書のうちにては殊にヒブリュー(Hebrew)のそれが最も深き注意をひきたり。さ

文學界

れば舊約全書 (Old Testament) は最も精密に攻究せらるゝの書となれり。  
 バイブルに對する此の新研究は吾人をして舊教義の高尙なる標準と現教會の悲境とを比較對照して考ふ可き必要を思はしめずんばあらず。かくて聖書は公刊せらるゝに至りぬ。蓋し當時印刷技術の發明あり。これが新智的發達に至大の好方便となれり。而してフマニズム派の事業は立ろに西歐諸國を通じて普くひろまれり。ハイデルベルグ (Heidelberg) 及びエルフルト (Erfurt) は其の獨逸フマニズムの中心點たりしがエルフルトのマラルヌス、ピストリウス (Malerus Pistorius) は獨逸文學界の主腦となれり。その他當時盛に行はれ居たるスコラー派 (Scholasticism) を攻撃せしゴタ (Gotta) のコンラド、ムート (Conrad Muth) あり。希臘聖書に對して特別の注意を拂ひ居たるハイデルベルグのラドルフ、アグリコラ (Rudolf Agricola) あり。アグリコラは畫家として、文學家として、又文献學者 (A learned philologist) として賞讃されたる人にして紀元一四八五年に死せし人なり。  
 その他新フマニズムの諸學者を左に列擧すれば、その主なるものは次ぎの如

し

獨逸のジョン・ロイヒリン (John Reuchlin)

ロッテルダム (Rotterdam) のエラスムス (Erasmus)

英國のトーマス・モーア (Thomas More)

ロイヒリン

ロイヒリンはヒブリウ語の聖書の原本について研究せし有名なる學者にして、紀元一五〇六年にはかれが傑作としてのヒブリウ文法 (Hebrew Grammar) あり。後世全歐洲を通じて永く其の適切なる材料として重寶視せらるゝ良書なり。

エラスムス

エラスムスは希臘語によりて哲學書を研究しプロテスタント (Protestant) に對して新約全書 (New Testament) に先鞭をつけたる人なり。かれは當時の無智迷心悖徳の物語りに對し之を妨止するの手段として聖書 (New Testament) を用ひたり。其の希臘語版のものは註釋、譯語などあまたふくみて、了解し易く、やがて宗教改革の準備としての一材料とはなれり。

トーマス、モア

トーマス・モーアは前者エラスムスの友人にして、これ亦改革に頗る熱心なる人又文學者としても有名なり、其の著ユートピア (極樂) 即ちくはしくは極樂の宗

教(The Religion of the Utopians)は當時の社會の腐敗を遺憾なく寫せるものなり。亦以つて如何に人道、學術の新生活、新秩序の必要要求が迫られたるかを察知し得べし。

吾人は以上に於いて宗教改革の準備的現象について縷々述べたり。次ぎには愈その改革そのものに就いてその大要を述べ可し。

## 第十六章 第十六世紀に於ける基督教の現象

宗教改革の氣運

基督教史全體の上より云つて此の十六世紀は最も必要なる時代なりとす。蓋しかの久しく氣運の向ひ居たりし宗教改革は遂に此の第十六世紀即ち千五百年代に於いて現はれたればなり。

總じて歴史上に現はるゝ大事件は常に突然成るに非ずして漸次知らず識らずの間に發生し發現す。今茲に述べんとする宗教改革亦この例に漏れず。改革の氣運は熟するも之に要するものは第一に人物なり。必要の度その極度に達すればその人物現はれ來り、その英雄的精神と、社會構成に適當せる偉大なる

改革の二特質

天才を有し且つ堅忍不拔の精力をその裏面に有する如きかくの如き人物は茲に時勢の必要が自ら生みだせり。プロテスタント派(Protestantism)は十六世紀の初期二十五五年間に於いて尙若木の樫の如く、その枝その芽共に嫩きも而かも其根に於いては遠く十四世紀の頃より深く地中に浸入して今や容易に抜く可からざるものあるに至れり。

茲に述べんとする宗教改革には二様の特質を有す。二様の特質とは即ち次ぎの如し。

一、國家的感念に基けること。  
宗教改革にあづかるもの一人として邦國の爲め民族の爲めと云ふ國家團體の感念によれるもの。

二、世界的感念に本づけること。

何れの國何れの民たるとを問はず北はノルウェー(Norway)より南はアルプス(Alps)まで東はツランシルヴァニア(Transylvania)より西はビスケー灣(Bay of Biscay)に至る間の諸地方がすべて悉く同一の時代思潮によりて色付けられ居たるこ

時代の聲

この二點は争ふ可からざる事實として數へられざる可からず。而して此の二特質を有する宗教改革(Reformation)は近世史(Modern History)に於ける重要な樞機たるの觀あり。單に宗教上の大革命たりしのみならず又智識上の大革命としても中世紀(Middle Ages)と近世期との間を劃する境界線たるものなりとす。宗教改造(Regeneration)に向つての要求の叫びは頗る聲高く且つ大いに沈痛なるものありき。迷信(Superstition)は眞の福音の教義と共に混和してわかつ可からざるに至れり。僧侶の道德は上は法王より下は一貧僧に至るまですべて腐敗せり。最高の教は今や宗教の爲めの教職ならで唯利用せんが爲めの職となり、その位置の高きを利用して種々の悖徳は行はれて、とがむるなきの有様なりき。而して一般社會をしてつとめて無智のまゝに打ちおかんとしたり。宗教界の事情當局者の態度すべてかくの如き模様なりしかば之に反抗して宗教改革の聲の現はれしは固より理の當然なりとす。實に改革の聲は即ち時代の聲なりと云ふも過言に非ざるなり。

改革の先覺者

改革者は聲の限りを張り揚げて絶叫し四民は立ち其の旗下に蟄集し來たり。かれ等の目的とするところは先づ此の點にあり。即ち宗教の腐敗は教會そのものに在るに依り先づ教會そのものを自ら進んで大に拂ひ清めんとするに在りたり。されどこは全然失敗に終りたり。

第一の企圖は成功せざりき。されどかれ等は善後策を立て第二の計劃を案出しぬ。即ち天下の志士相集まりて茲に舊來の教會をはなれたる獨立的宗教團體を確立し以つて腐敗教會を壓せんとするこゝこれなり。此の計劃は首尾よく成効したり。其の結果プロテスタント教會(Protestant Churches)の一新教を立て爾來すべて今日に至るまで優に世界開明の諸國を風靡するの基督教とはなりぬ。

舊來の基督教の教義に於いて又其の宗教的生命に於いて改革斷行の先導者たりしものは誰れとかなす。此の問題は頗る答へにくし。其の眞の改革者の名前は明かに史上に残れりと云ふことを得ず。されど其の事業が英雄豪傑的に完成せられたることの事實は蔽ふ可からざる點にして又一般の認むるとこ

るなり。

耶蘇新教即ちプロテスタント(Protestantism)派が教界内部に勃興して其の隆盛の域に達せし迄には少なからぬ年月と堅實(Slow, but solid)なる基礎をかため得たり。吾人は宗教改革を誰れ一人の功蹟として數ふことは能はざるもしかも其の改革の先導者たるものが全然指名し得られざるには非ざるなり。

眞の宗教改革者は其の活動の舞臺殊に獨逸の舞臺に於いては其の生命を犠牲にする位のこととはさしたることゝは認められず、物の數に見られざりしが如し。さればチャールズ五世(Charles V)が獨逸に君臨せし時の如き帝は基督教改革者プロテスタント徒に對してつとめて穩當なる處置に出でたり即ち帝は之が鎮定策として死そのものゝ外成るべく他の種々なる方法を取りたるが如き故ありと云ふべし。

宗教改革について之が先鞭をつけたるものは己に十四五世紀の頃より見出し得べきが如し。今その開拓者(Pioneers of the Reformation)の主なるものを左に列舉せん。

- ピーター・デリ(Peter D'Ailly)
- ジョーン・チャリエル・ゲルソン(John Charlier Gerson)
- ニコラス・クレマンシ(Nicholas Clemanges)
- マスター・エカルト(Master Eckhart)
- ジョーン・ルイス・ブレンツ(John Ruybroeck)
- ヘンリクスン(Henry Suso)
- ジョーン・トローラー(John Tauler)

此れ等の宗教家の活動が積もり積りて遂に十六世紀には改革の實行者としてかの有名なるマルチン・ルーテル(Martin Luther)を見るに至りしなり。

マルチン・ルーテル(Martin Luther)は紀元一四八三年十一月十二日サクソニー(Saxony)のアイスレーブン(Eisleben)の地に生れ紀元一五四六年二月十八日同地に死せり。父は鑛夫にして赤貧洗ふが如き身なりしも、子のマルチンは教育に於いて最高の學府エルフルト大學(University of Erfurt)にまで進むことを得たり。この大學は北歐に於けるフマニスト派(Humanistic)の一中心たり。

マルチン、  
ルーテル

紀元一五〇八年ルータール(Luther)は哲學の教授(Professor)としてウイッテンベルグ(Wittenberg)に招聘せられたり。依つてエルフルト(Erfurt)の地を去つて此の地に來たれり。

ルータールはトーマスカゼタヌス(Thomas Cajetan)に反對して教會の功蹟を否認し法王クレメント六世(Pope Clement VI)に反對して聖書宗教會議によりて法王の最上權を制限せんとせり。ルータールが此れ等の意見はライプツヒ(Leipzig)に於いて明かにせられたり。ルータール(Luther)は茲にインゴルドスタット(Ingolstadt)大學の學者エック(Eck)によりて強硬なる反抗を受けたり。而かのみならず紀元一五二〇年ドミニカン派の徒(Dominicans)はレオ十世(Lex)にすゝめて宗教改革者たるルータールをば破門めしめんとしたり。ルータールが記録は無視せられウイッテンベルグ(Wittenberg)の町に於いて悉く焼きつくされたり。又いつて當時如何にルータールの改革的地歩の強固なりしかを察するに足るべし。

他方に於いてルータールが擧は別に有力なる後援者を有し居たり。アルサス(Alsace)のマルチンブセル(Martin Bucer)の如き、又スイツツプシユワルテエルド

他の改革者

(Philip Schwarzerd)メランチオン(Melancthon)の如きを有したり。殊に後者フイリプは獨逸宗教改革(German Reformation)に秩序を立てし點に於いて多大の貢獻をなせし人なり。その他ルータールと共に同じ歩調をとりて之が改革に極力つとめたる人は次ぎの如し。

エコランパヂウス(Ecolanpadius)

カールスタット(Carlstadt)

カルヴァイン(Calvin)

當時の改革者は云ふまでもなく盲目的に舊來のバイブルを信仰するが如き所謂 blind Bibliolaters には非ざるなり。而してルータール派のすべての改革者は聖書の普及に舊來のものを以つてすることを非としてそれぞれ其の地方地方の土語方言にて書き直されたるものを廣めんとし其の祈禱に用ふる用語の如きも舊來のラテン語(Latin phryers)を遮けて自由に土語にて代用し得るものとのことを主張せり。

ルータール常に謂へらく、

祈禱語



『予は法王を目するに法王を以つてす。

然るに法王等は自ら以つて神(God)と同一視せられんことをこれ予に望めり』

と。後紀元一五二一年四月獨逸ウオームス(Worms)の會議は開かれぬ。而してルーテルは之に招かれたりしも斷乎として行かず。百方之を強ひしも遂に應ずるところなく、曰く。

『予は茲に止まらんのみ。予は外に道なし。

神よ助け玉へ、アーメン』

文豪カーライル(Carlyle)はルーテルが此の美しき態度を寫して曰はく、吾が近世の歴史上此の事件は最も注意すべき瞬間なり。Greatest momentなり。後に英國のピューリタン派(English Puritanism)の成りしこと、英國議會の成りしこと、その他アメリカの獨立、佛蘭西の革命の如きより近くは現代に於ける歐洲文明國の大事業の如きすべてこれ等の胚胎の起源は遠く此のルーテルの宗教改革によらざるものあらず。それ故ルーテルが其の瞬間に右せず左せしならば總べて

の世界的大事業は如何なる有様になり居るや又察する可からざるなり。とカーライルが言又あたれるに近し。

かくてウオームス(Worms)の會議はルーテルに對して布告を出し宣告文を發しぬ。かれが逮捕旦夕に迫れる折しも一騎士あり。ワルトブルグ(Warburg)の城砦内にかれを庇護し收容しぬ。ルーテルは茲に滞在すること八ヶ月その間すらベンをとりて大いに書くところありたり。即ち新約全書の全體と及び舊約全書の一部分との翻譯は丁度此の間になされたるルーテルの事業なり。

紀元一五二二年九月新約全書は印刷せられたり。此の事業や實に宗教改革てふ永久的事業に向つてかくの如き大事業は他にあらざるなり。その新聖書は十ヶ年の間に版を重ねること十六版又以て如何に世界の渴望せしものなるかを察し得べし。ルーテルの此の新聖書はヒブリア語の聖書及び希臘語のそれより直接に翻譯せられたるもの而かも文體は明瞭にして力あり。實に翻譯ものとして無二の忠實なる傑作なりと稱すべし。此のバイブルは又間接に獨逸語なるものを確立してその説明的の場合にあれば又叙情的の場合にあればよく

聖書翻譯

之れをして適合せしめんことをつとめ、ルーテルはその模範を示したるが如き観あり。

スピレンス

ルーテルの教は早くも獨逸國內には普及したり。先づ最初サクソニーの選擧侯フレデリック(Frederic the Elector of Saxony)は現れたり。然るにメヂチ家の法王クレメント七世(Clement VII)の如きは陰に陽に新宗教の擧を妨げ居たり。蓋しクレメントの意見は羅馬、ミラン(Milan)、ヴェニス(Venice)瑞西の如きを打つて一丸となさんとするに在りしも遂に成らざりき。紀元一五二五年ルーテルに對する同盟は結ばれ即ちトルゴー條約(Ligague of Torgau) 現はれしも帝王對法王軍の爲めに反つて大事に至らずしてやみぬ。紀元一五二六年オーネストリア(Austria)のフェルチナンド(Ferdinand)王の下にスピレンスの會議(Diet of Spires)あり、改革者の主張は勝利を得て、僧侶の婚姻、土語の祈禱、内々の會食廢止などすべて認めらるゝに至れり。

プロテスタント

チャールス(Charles)は由來舊派に固執せしものなれども遂に此の條規に従はざる可からざるに至れり。かくてルーテル(Luther)派は法律上の保安を得フエ

ルチナンド(Ferdinand)及びチャールス(Charles)は遂に失敗に歸し紀元一五二九年更らに第二回のスピレンス會議(Diet of Spires)を開きてそのルーテルの教と主張を確實ならしめたり。その教を普通にプロテスタント(Protestant)と云ふ。耶蘇新教即ちこれなり。

獨逸の宗教改革に關聯して瑞西(Swice)の地にも其の氣運現はれたり。其の活動の中心たりし人はエラスムス(Erasmus)を崇拜せる一僧侶ウルリック、ジングル(Uric Zingle)なりとす。

ジングル

ジングル(Zingle)が宗教改革の動機はコンスタンス(Constance)の教會僧正に對する敵愾心より出でたるによると雖も、素とジングルはルーテルと同じく凡そ宗教なるものは聖書 Scripture の基礎の上に依らざる可からざるものなりとすることを主張したり。ジングルの糾合せし宗教團體はまた、くまに多數を集め得ていつしか瑞西の地に雄飛するに至れり。

ジングルは儀式形式を重く見ず、洗禮の有がたさを否認し而して自ら公言して曰はく、神の恵みは常に直接に吾人に傳へらるゝものなり何ぞ法王教職の媒

を俟たんやと。かくてジングルは一時瑞西を風靡したり。されど瑞西の宗教改革は單にジングルのみによりて行はれたるにはあらざるなり。即ち他にジングル以上に有力なるものあり。カルヴイン(Calvin)即ちこれなり。カルヴイン(Calvin)は耶蘇新敎プロテスタント(Protestantism)に對して少なからぬ貢獻をなし、其の才幹は殊に一種獨特の宗教組織(Adisinct ecclesiastical organization)を立てしことによりて現はれたり。而してカルヴインは又佛蘭西に於ける宗教改革者の先導者たり。

カルヴインが聖書の註釋及び宗教改革の案はゼネヴァ湖(Geneva)の傍にてなされたり。蓋し同地はかれが晩年(紀元一五四一年死)に至る迄の活動の地たりしなり。佛蘭西の教會、蘇士(Souland)及びニーザラント(Netherland)の教會の改革は一つに此のカルヴインが改革案に本づけるものなり。蓋しカルヴイン派の教會の特色は次ぎに示す二つの點にあり。又以つてカルヴインが初志を察するに足らん。

一、宗教上の事柄はすべて國家支配の元より分離して存せしむること。爾來

ジングル派と  
ルuter派との  
對するカルヴ  
イン派の關係

蘇國の歴史は此の例にもれず。

二、個人的布敎をやめて團體的の布敎を主義とすること。敎權を有する一人單位の傳道を擴張して更らに高層團體の布敎の組織を立つること。

かゝる間にジングル派は瑞西に於いて改革の氣運熱し、獨逸佛蘭西亦聯合して互に氣脈を通せんする際、紀元一五四九年カルヴインはジングル派と同盟相通じぬ。然るにカルヴインはルuter派に對しては其の關係さまで調和を密にする能はざりしもの如し。カルヴインの死後、パラチネート(Palatinate)に於いてルuter派と、カルヴイン派との間に争を見るに至れり。其の軋轢は此の世紀のうちにおさまりつかず、遂には三十年戦争(Thirty Years' War)の時に及んでも尙此の兩派の不和を有して孰れもその共同の敵に當ること能はざりし始末なりき。

さて翻つて獨逸國を見るに、獨逸に於ける宗教改革のうち其の神學的基礎を確立したるもの現はれたり。メラントヨン(Melancton)即ちこれなり。かれはルuter教會(Lutheran Church)に就いて云ふ可き二個の事件を草せり。

ツレントの會

一、アウグスブルグの懺悔(Augsburg Confession) (1530)  
 二、アウグスブルグの懺悔に對する辯疏(Apology for the Augsburg Confession)  
 此の二論文はルーテル教義の天晴れ美しき記述にしてかれは之を目するに所謂サキソンの懺悔(Saxon Confession)の名を以つてせり。つまり此は後紀元一五五一年ツレントの會議(Council of Trent)に於けるプロテスタント教(Protestant Faith)の言明なり。かくの如くしてルーテルに對するメランチオン(Melancthon)の關係は宗教改革を遂行するに頗る樞要なるものなりき。

然るに十六世紀の中葉ジュリウス三世(Julius III)の時ユーカリストに關してツレント(Trent)の宗教會議は催されんとせり。ローマ派に對してルーテル派カルズイン派及びジッゲル派(Lutheran, Calvinistic, Zwinglian)などすべて會集せり。會議はモーリス(Maurice)の軍の爲めに妨げられて紀元一五六二年まで延期せられたり。

ツレント(Trent)の宗教會議は紀元一五六二年にピウス四世(Pius IV)の世に開かれ中世紀時代に於ける教義は再び確かめられ偶像禮拜(Worshipping images)は認

英國の宗教改

めらるゝに至れり。かくの如く此の會議に於いて法王派の教權は強められたり。されど此れが結果僧侶輩の悖德妄行は大いに減少せらるゝに至れり。

大陸の形勢かくの如き模様なるに英國に於いては十六世紀の後半はエリザベスの御世(Elizabeth's reign)宗教改革に向つて地歩を進めたり。蓋しこはエドワード六世(Edward VI)の即位及び大政治家ソーマセット(Somerset)並びにノーザンバールランド(Norumberland)の盛運に頗る關係を有するものなり。英吉利斯の土語俗語を以つて書かれたる第一第二の祈禱書類(Prayer Book and Articles)の如きはエリザベス(Elizabeth)の時の宗教改革に根本的基礎を與へたるものなり。つまり英國の宗教改革はジッゲリアン派の新教(Zinglian Protestantism)にして總べての教職は悉く新教徒を以つて充たさるゝに至れり。されど羅馬は英國の此の状態を見て如何にもして此の氣運を舊に復せしめんことに注意し居れり。英國の地たる決してその油断を免れ得べきことに非ざるなり。しかのみならず既に英國内部に於いても有力なる舊教派の存するありて、機を見て復舊せしめんとするの策をとれり。メーリー黨(Mary)の反抗即ちこれなり。此の黨は頑強

エリザベス

に羅馬法王派に執し。教會に英語の祈禱を拒みて殊更にラテン語(Latin)を以つて強ひ居たり。又以つて如何に耶蘇新教に反對し居たりしかを知るべし。されどかのエリザベス(Elizabeth)がメーリの後をつぎて立ちてより新教(Protestantism)は國教(National faith)として目せらるゝに至れり。假令新教の内部には多少の小分派はあるにしろ宗教改革は明かに此のエリザベス(Elizabeth)の時に及んで事實として現るに至れり。而してその長き御世は愈新教(Protestantism)をして確實ならしめたり。

ブラウン派

英國の宗教改革に就いて最も注意すべき出來事は、亞米利加の方面に於いてブラウン派(Brownist Sect)の起りしこと即ちこれなり。ロバート・ブラウン(Robert Brown)なるもの初めてケンブリヂ(Cambridge)にありてピューリタン(Puritan)の考を持し居たり。後その黨餘はブラウン派の名を以つて知られ、かれ等は遂に羅馬舊教に對しては勿論又英國の新教に對しても敵意を有するに至れり。後英國より出て、ニーサーランド(Netherlands)地方に至り、果ては新陸地アメリカ(The New World)にまで到りて、茲に新殖民地の間に宗教的發達を見るに至れり。

スコットランドの宗教改革

當時此の十六世紀の後半には又スコットランド(Scotland)にも宗教改革行はれたり。その主導者はジョン・ノックス(John Knox)なり。

かれは銳意耶蘇新教の布教をはかれり。紀元一五七二年かれが死せし當時は宛かも此の改革の完成せられたるの時なりき。

佛蘭西の宗教改革

當時佛蘭西に於いても亦耶蘇新教徒に熱心せるものあり。之をユーゼノツト(Huguenots)と云ふ。紀元一五八九年ヘンリー六世(Henry VI)の立つ。既に同國にてはピューローの平和會議(Peace of Beaulieu)に於いて禮拜及び教義の自由は認められ居たれどもヘンリー六世の即位の時重ねてその信教の自由を明かにし紀元一五九八年ナントの令(Edict of Nantes)によりて、新教徒に向て舊教の信徒と同様の自由を法律上認めらるゝに至れり。かくて佛蘭西には此の十六世紀の末葉より十七世紀にかけて非常なる新教徒の數を見るに至れり。

其他諸國の宗教改革

以上舉げたるは宗教改革の主なるものなり。十六世紀に於ける宗教界の現象は尙此の他の地方にも少なからず見出さる。すなはちスカンデナヴィアン(Scandinavian)の方面に於いてスエデン(Sweden)及び諾威(Norway)の改革あり。尙丁

抹及びアイスランド(Iceland)の地にもこれあり。こはルーテルの友人クリスチヤン三世(Christian III)の力によるものなり。又和蘭方面に於いてはフィリップ二世の改革に盡悴せるあり。又ポーランド地方に於いてはボヘミア(Bohemia)の改革熱に影響せられて紀元一五七四年頃その改革を見るに至れり。宗教改革の大要は以上の如し。今之が要點をつまみて獨逸以外の十六世紀に於ける宗教改革の國名とその改革の年代とを列擧すれば次の如し。

- 一、英國 紀元一五三三年
- 二、スコットランド 紀元一五六〇年
- 三、セテヴァ 紀元一五四〇年
- 四、瑞西 紀元一五三三年
- 五、ニーザーランド 紀元一五八一年
- 六、ブランデンブルグ 紀元一五五五年
- 七、丁抹 紀元一五三八年
- 八、瑞典 紀元一五六〇年

改革の結果

の如きものなり。

歐洲に於けるかくの如き宗教改革はその結果如何なることを吾人に教ふるか。吾人は容易にその結果に就いて云々すること能はず。されど之によりて諸國民の自由思想を高めたること、市民権を純潔ならしめたること。共和主義の思想の養はれたること等は争ふ可からざるものなり。されど又歐洲改革擾亂の際に於いて歐洲を出で、新大陸に來るもの亦少なからざりき。否後世亞米利加合衆國の獨立革命の思想も或は當時の自由思想に影響せられたるもの全然なきを保しがたし。

次に宗教改革が學問上に及ぼせる影響はこれ又決して少なしとせず。學術は世界に普及せられ諸大學は新教の搖籃(Cradle)となり。聖書の翻譯は國語の練磨に與つて至大の効あり。殊に獨逸語の如きはルーテルによりて確かなる統一を得るに至れり。

獨逸國內には此の宗教改革の結果として諸方に大學の勃興あり。又公立學校はルーテルが力によりて國內にあまた設立せられたり。又今日見る多くの

ギムナジウム (Gymnasium) もその起源をこの宗教改革當時に有せり。當時現れたる大學はその數二十有餘そのうち四分の三は皆新教プロテスタント (Protestant) 派の大學なり。和蘭陀に於いても當時五つの新教大學現れたり。かくて到るところ宗教改革は成効して、永久の力を獲得し、教育、倫理、政治に於いても爾後長足の進歩發達を見るを得るに至れり。

## 第十七章 第十七世紀にける基督教

第十六世紀の末葉は歐洲の各國新教の勃興を以つて終りぬ。而して越えて十七世紀の初期は此の新教諸國の争ひが次第に激烈に向ひ、紀元一六一八年ドルトの會議 (Synod of Dort) に至つてその争ひの絶頂に達し居たり。蓋し何れも人類の自由 (Human freedom) を主張して之を宗教上の教義に結び付けんとするものにして、其の最も有勢なるものはルイテル派のものに非ずして、カルヴァイン派のものなりとす。殊に和蘭陀のカルヴァイン派 (Calvinistic Church of Holland) ライデン大學の教授 (A professor at Leiden University) を以つて最も盛なるものとす。カル

カルヴァイン派  
の自由意志

ヴァイン派の教會のものはドルト (Dort) に會して、有名なる五ヶ條の教義を定めたり。其の主なるものは神の恩恵の偉大 (Irresistible Grace) なる帝王選定の自由意志とに關せるもの、如く、又罪惡の罪滅しのこと (Original Sin) 及び基督の死と帝王の選定の便益等 (Particular Redemption) に就いて規定せられたり。これ等の條項がその政治的色を帯へるは蓋し素とアルメニウス (Armenius) の主義となせしところなり。アルメニウスの考はドルトの會議に於いて認められたるなり。

五ヶ條のカルヴァイン派の條文 (Five Article) は先づ和蘭陀に強ひられ、之に調印を拒みし七百の家族の如きは處刑に附せられたり。殊にバルネヘルト (Barneveldt) は死刑に宣告せられ、グロシウス (Grotius) は終身懲役に投せられたり。グロシウスは紀元一六二一年獄を遁れ、辛慘を嘗めつくして、佛蘭西の宮庭に投せり。茲にグロシウスは裁判官として、歴史家として、又聖書の註釋者 (Biblical Commentator) として、かれが晩年の名聲を殘せり。

かくの如くにして兎も角もアルメニウス派 (Armenian) は和蘭陀に於いて非常なる迫害を蒙りたり。

グロシウス

三十年戦争の  
影響

當時羅馬舊教は如何と云ふに、紀元一六〇〇年より一六一九年に至る間は羅馬教(Romanism)は甚だ活動的なりき。假令シギスムンド三世(Sigismund III)の如き瑞典の地に於いて其の布教に成效を見る能はざりしもかれがポーランド(Poland)の王國に於いて新教(Protestantism)の布教は首尾よくその効を奏したり。ゼスウイット派(Jesuits)の布教師もシギスムンド(Sigismund)の助けを得てロシアの正教派(Orthodox Russian)を羅馬教化せんことをつとめ居たり。されど國の諸侯によりて之が反抗的運動(Reactionary movement)は企てられたり。新教派に於いてはパラチネート(Palatinate)ブランデンブルグ(Brandenburg)及びウイッテンベルグ(Wittenberg)バーデン(Baden)の諸侯プロテスタント聯合(Protestant Union)を設立して舊教に相對抗したり。然るに又舊教派の方に於いてはバヴァリア(Bavaria)のマキシミリアン(Maximilian)その他七人の舊教諸侯同盟してカソリック同盟(Catholic League)を形成しフェルディナンド(Ferdinand)及びスペイン(Spain)を此の同盟に加入したり。

かくて三十年戦争(The Thirty Years' War)を結びたるウエストファリアの條約

(The Treaty of Westphalia—1648)にてホランデ(Holland) 瑞西(Switzerland) 及び瑞典(Sweden)の自由獨立となりしと同時に獨逸の新教徒(German Protestants)は從來の教領制限の勅令を撤回せしむることを得たり。尙當時新教の榮え行はれたりし地方を列擧すれば次ぎの如し。

- 一 北獨逸(Northern Germany)
- 二 北ネーザラント(Northern Netherland)
- 三 丁抹(Denmark)
- 四 瑞典(Sweden)
- 五 諾威(Norway)

北獨逸に於ける新教派の支配者(Protestant Rulers)は孰れも選舉侯としての權力を認められルーテル派及び改革黨は共に宗教團體の總べての仕事を支配するの權力を附與せられたり。而して羅馬カソリック教國(Roman Catholic Countries)に對する新教國領域の國境は充分嚴重に決定せられ今も尙其の時の境界を改むるなき程なり。



大陸方面に於ける新教國は其の後教議の上に少なからぬ自由妨害を蒙りたり。かのアルメニウス派(Armenians)の錚々たるグロシウス(Grotius)の如き舊約全書に對する自己の新見解の行はれんことを主張しつとめて之を合理的なりと標榜せり。又宗教改革史上に最も有名なるかのルイ十四世(Louis XIV)の如きはゼスウイット(Jesuits)の言によりて、紀元一五九八年の條約(Edict of 1598)を否認して、五〇〇、〇〇〇人の佛蘭西教徒を放逐しぬ。かれ等は英國、和蘭、陀亞米利加の地に離散しぬ。之に引きつゞき間もなくワルデンス派(Waldenses)即ちガルズイン派新教徒(Calvinistic Protestants)と氣脈を通せるものどもは殘虐なる殺戮を蒙りたり。こは紀元一六八六年より同じく一六九六年に至る間のことなりとす。

カルズイン派の勝利

然るにカルズイン派の袖領は此の十七世紀の末年スコットランド(Scotland)に現はれたり。蘇國のカーク(Kirk)即ちこれなり。初め紀元一六四三年英國ウエストミンスター會議(Westminster Assembly)の開始せらるゝや會議は宗教改革の實行に於いてスコットランドの教會(Church of Scotland)とつとめて歩調を一つにせ

ゼームス一世の時の基督教

んとし、蘇國教會牧師(Scottish Commissioners)の應援するもの多し。ウエストミンスターの會議はスコットランド教會(Scottish Church)の協會を以つて自ら誇りとなし、カルズイン派の儀式(Calvinistic formularies)式場に自ら長たるの價値を自任せり。かくてウエストミンスターの公衆禮拜(Directory for Public Worship)はスコットランド教會に採用せらるゝに至れり。

然るにオレンジ侯(Orange Sovereign)は紀元一六六〇年の教會規定(eclesiastical status)を恢復し、布教師牧師に加擔してスコットランドに於ける教徒を虐殺せり。尙僧侶僧正の殺戮は此の世紀を通じてやむことなかりしが、女王アーン(Queen Anne)の御代に至りてしばしやみぬ。されど紀元一七一四年より同じく紀元一七九二年に至る間スコットランドの基督教(Scottish Christianity)の代表者は唯専らプレスビテリアンの確立(Presbyterian Establishment)にこゝとめ居たり。

今吾人は少しく此の十七世紀に於ける英國教會の消長に就いて觀察せんに其の大要次きの如し。

ゼームス一世(James I)の基督教に對する政策は、かれは既にスコットランドの

教會 (English Church) に加擔するところありしが又好んで舊教派の教理 (Ecclesiastical System) を許容せり。蓋し帝王としての尊嚴は此の舊教によりて認めらるるものにして、ゼームスは成るべく之が復活を欲し居たりしものゝ如し。ゼームス (James I) の御代に於ける宗教上の注意事件は祈禱書の公刊 (紀元一六〇四年) とバイブルの翻譯 (Justly celebrated Bible Translation of 1611) の公刊なりとす。

後羅馬徒派のゼームス二世 (James II) はその即位の初めよりローマ教徒とクエーカー教徒 (Romanist and Quakers) とを助けその獄につながれたるものは之を放免し。尙かれは十七世紀の末葉テスト條令 (Test Act) を無視して羅馬教徒を或は官吏として、或は軍人として、或は僧正として之を任用せしもの多し。羅馬派の中心たるパーカー (Parker) がオクスフォードの僧正 (Bishop of Oxford) に任命せられたるが如きその一例なり。

ゼームス二世の御世に於いて尤も著明なることは罪を悔ゆる總べての人々をゆるさんとする詔勅 (Declaration of Indulgence) を各教會に發布せしむべく命ぜしこと即ちこれなり。或る僧正は此の命令に反對して反つて獄に投せられたる

あり。されど僧正側の有勢なるその多くはオレンジ侯ウキリアム (William of Orange) に迫りて之を許容せしめんとする迄に至れり。かくて紀元一六八八年の宗教改革に於いて、英國の政府に服従せざるもの多し。之を Nonjuror と云ふ。そのうち主なるものを左の人々となす。

- サンククロフト (Saneroff)      ケン (Ken)
- レスリー (Leslie)                  ヒックス (Hickes)
- ドンウェル (Donwell)              ナルソン (Nelson)

十七世紀の末葉ウキリアム三世 (William III) は立ちぬ。ウキリアムはプレスビテリアン派 (Presbyterian) に屬す。かれは宗教上穩健なる政策をとれり。されど其の後英國國教は歴代の諸主並びに國會より妨げられしも、其の教議と組織とは或文律の發表と共に在米殖民にまでも認めらるゝに至れり。其の布教及び教育上の精神は益々活動して、いつしか福音傳道と基督教普及の二大事業の基礎を確立するに至れり。

此の時代は英國の大々の布教が着々その功を奏せし時代なり。單に布教そ

英國の基督教

のものゝみならず。又教理の研究に於いて、又聖書の公刊、各國語の翻譯(Polyglot)に於いて見るべきものありし時代なりとす。例へば、

ピーヤン(Pearson)—Treatise on the Creed.

ウォルトン(Walton)—Polyglot Bible

ゴーデン(Garden)—Eikon Basilika.

をその主なるものなりとす。又學術的方面に於いては、ケンブリッジ大學(Cambridge University)に於いて古代のプラトーン派(Platonists)として著名なるものあり。カドウォールヌ(Cudworth)及びヘンリー・モーア(Henry More)の如きこれなり。當時又正教派に反對せる宗派あり。之をラチチューヂナル派(Latitudinarian school)と云ふ。此の派はフラトーン派の如く哲學的ならず又神秘派(Mystic)の如く激烈ならず。むしろ、冷靜にして合理的なる一派なり。そのうち代表的なるは、パーキット(Burnet)パトリック・チロツオン(Tillotson)及びテニンソン(Tenison)なりとす。其の最後の二人即ちチロツオン及びテニンソンは紀元一六九一年より同一六九五年に至る英國カニタペリーの大神正たりし人々なり。

露西亞に於ける希臘教

吾人は茲に十七世紀の基督教史を終るに當つて此の世紀に於ける東歐基督教國の一般に就いて略言するところなかるべからず。東歐教會に於いて注意すべきことは、ウルバン八世(Urban VIII)が古代の宗教分派を根絶せんことに勉めたることは是れなり。當時之について羅馬の布教師、學者たちは種々の意見を書きて、以つて希臘、アルメニウス(Armenius)及びネストリアン(Nestorian)の教徒をば西歐組合(Communion of the West)と區別して考ふるの必要なことを痛論したり。されどシリルス・ルカリス(Cyrillus Lucaris)と云へるコンスタンチノーブルの學者(Learned Patriarch of Constantinople)は兩派聯合の企劃に反對して極力改革派の主義に賛同せる旨を明かにしたり。紀元一六三八年ルカリス(Lucaris)は死刑に處せられたり。而してその後継者ヘルヘアのシリルス(Cyrillus of Berhoea)はゼスウイット派に屬し、希臘の教徒をして羅馬教の下に屬從せしめたり。されどかれの法策あまりに度を過ぎ未だ一ヶ年を出でざるに之に嫌焉たる考を抱くものあまた現はるゝに至れり。紀元一六六六年魯西亞教會(Russian Church)には教會の改革を欲せる僧侶イヌブラニキ(Iobraniki)の争ひあり。爲めに互に虐殺

を事として惨状云ふ可からず、ピーター大帝の時まで其の有様はつゞきたり。  
露西亞はピーター大帝(Peter the Great)の時教會の制度(eclesiastical System)を改めたり。その改められたる點は次ぎの二點なりとす。

一、總教長を抑制せしこと(Suppression of the Patriarchate)

二、帝權の下に教權を置くこと(Absorption of its powers by the Crown)

紀元一七〇〇年より紀元一七二〇年に至る間ピーター(Peter)は全國の教會に於いて總教師(Vicar-general)として現はれ、其後魯帝(Czar)は政權、外交權を掌握すると同時に又教權を握り居たり。ピーターは虐殺をやめ、つとめて國內に羅馬教普及をはかりたりと雖も、しかも大體に於いては宗教上温和なる主義を取るを方針となせり。

## 第十八章 第十八世紀に於ける基督教

第十八世紀に於ける基督教の序幕はゼスウイット教(Jesuits)に對する反對運動の最も激烈なりしことに始まる。

ゼスウイット  
派及反對派

始め十六世紀の中葉ポール三世(Paul III)によりてゼスウイット教界に於ける施惠、慈善の新規定は確定せられ、貧病及び慰安救助に關する仕事を以つて其のつとめとなしたり。而して此れに屬する人々のうちにはスコラスチク派(Scholastic)ノビス派(Novices)など種々あり。然るにかれ等は多く其の倫理的教理より活動せずして、宗徒の力によりて政治的に走れり。かくて共和的精神を其の間に養ひ來たり、屢々國の統御者と衝突をかもすことを見るに至れり。

ゼスウイットに對する反抗は統治權を握れる帝王そのものの間に現はれたり。其の最も高潮に達したる時代を此の十八世紀の始めなりとす。諸帝王は自ら攻守的態度を取りて之に備へ、ベネデクト十四世(Benedict XIV)之に向つて攻撃を始めぬ。かくてクレメント十三世(Clement XIII)は葡萄牙に於いて先づ之を鎮壓し、あまたのゼスウイット教徒は紀元一七五九年刑罰に處せられたり。尙紀元一七六四年には佛蘭西に於いて、紀元一七六七年には西班牙に於いて、紀元一七六七—八年に於いてはシシリ(Sicily)及びパルマ(Parma)に於いて處刑を見るれり。獨逸に於いては何等の直接の壓迫を見ざりしも、教職に對して著し

ピウス七世

き制限を加へられたり。紀元一七七三年にはクレメント十四世の旨によりて遂にゼスウイットの教職は廢せられたり。蓋し教會に對してそれが威歴的のものなりと考へられたればなり。されど十九世紀に入りピウス七世(Pius VII)の現はれてより再び之が恢復を見諸國の間にゼスウイット派は又盛に流布せらるゝに至れり。

ゼスウイットの傳道教會は急激なる速力を以つて組織せられたり。國の軍事上と商業上との發展に伴ひ、ゼスウイットの布及は歐洲の大部分にまた加れり。即ち、

- 一、オーストリア(Austria)
- 二、バイエルン(Bavaria)
- 三、ポーランド(Poland)
- 四、バルチック諸邦國(Baltic Provinces)
- 五、瑞典(Sweden)
- 六、大英國(Great Britain)

の間には瞬く間に之が布教を見たり。

かくの如く十八世紀に於いてゼスウイット派は盛大をなすに至りたり。されどゼスウイット派に就いて特に注意すべき點は歐洲内部に於ける其れより

フランシス、  
ザヴィエの日  
本布教

も、むしろ外部に於ける初期の發展即ちこれなり。即ち十六世紀に於ける埃及方面のクリストファー・ロドリック(Christopher Roderie)東方印度方面のフランシス・ザヴィエ(Francis Xavier)の活動の如きその一例なり。ザヴィエの活動は日本を以つて最も主となす。爲めに日本にはかれが布教の六ヶ年のうちに四萬の信徒を得ることを得たりと云ふ。尙當時ゼスウイットの布教は南洋フィリピン群島(Philippine Islands)に迄も及びて首尾よく成効せり。されど流石にカロリン群島(Carolines)に於いては其の功を見るを得ざりき。

ブラジル布教

其の他亞米利加方面を見るに、エマニエル・ゾノブレガ(Emanuel de Nobrega)などのブラジル布教(Mission to Brazil)を始めとし、ピーター・クレーヴ(Peter Clave)單身の南米に布教し殊にパラゲール(Parguayan)二萬有餘の黒人土人を説きしが如き頗る苦心慘憺のあと見るべきものあり。北米にてはフロリダ(Florida)に現れ、又メキシコ(Mexico)に現れたるクノ(Kuno)あり。また當時佛蘭西領たりし加奈陀(Canada)の地はこれ又ゼスウイットの布教師のつとめ居たるところなりしなり。ゼスウイット教の布教は大略かくの如き有様なりき。されど羅馬はゼ

メキシコ布教

スウィット教に對してその進行を全然傍觀してのみは居らざりき。既に基督  
教が支那の儒教(Religion of Confucius)によりて影響せられし時の如きクレメント  
十一世(Clement XI)及びインノセント十二世(Innocent XII)によりて、いたく難せら  
れたり。

ゼスウィット教徒(Jesuits)の商業的遠征は葡萄牙人によりて嫉妬心を以つて  
久しく目せられ居たり。蓋し其の布教の様子はザヴィエ(Xavier)などの高尚な  
る宗教心に矛盾せるものありたればなり。法王クレメント十三世の如き法王  
權の行はれて古代に於ける教權の華美復活を希望し居たるや切なり。されど  
十八世紀に於ける時代宗教心は法王によりて左右すること能はず、法王權は漸  
次衰微にかたむきぬ。

かくてトレントの會議(Council of Trent)以後法王クレメント十三世の衰運と共  
にゼスウィットの衰微は全歐洲にわたりに現はれたり。單に佛蘭西と云はず  
ボヘミア(Bohemia)に於いても、又デンマルク(Denmark)に於いても亦同様なり。パ  
ルマ侯(Duke of Parma)の如きは民の羅馬派に加勢するを禁じて自ら法王の教權

クレメント十  
三世

ボヘミア、丁  
抹の布教

マリア、テレ  
サの政策

(Holy See)に反對して攻撃を加へたり。クレメント十三世(Clement XIII)之を冷  
笑視去り居たりと雖も到底及ばざりき。時にボルボン家全體(Whole house of Bo-  
urbon)はパルマ(Parma)に加擔し、アヴィニオン(Avignon)ベネVENTO(Benevento)及び  
ポンテコルボ(Pontecorvo)などの地はその敵によりて占領せられたればなり。

法王クレメント(Clement)は奥太利(Austria)に走りぬ。されど、奥太利のマリア、テ  
レサ(Maria Theresa)は當時宗教上の事件を以つて煩を買ふことを厭ひ、法王を敢  
へて拒絶したり。今や法王は倚るに道なく、進退谷まりぬ。唯茲に一縷の望の  
存するところはパルマの黨ボルボン使節(Bourbon Ambassadors)と和解手を握り  
合ふに在るのみ。されど使節などの勢は法王に迫りてゼスウィット派根絶を  
要求してやまず。

紀元一七七三年クレメント十四世は有名なる布告(Dominus ac Redemptor noster)  
を出し、之によりて二萬のゼスウィット僧侶は服制せられ、且つ悉く現俗の階級  
(Ranks of the Secular clergy)に貶せられたり。

十八世紀の末葉クレメント法王の死後ゼスウィット教徒(Jesuit Society)はや

反動的カソッ  
ック教

や頭を擡げ得たり。蓋し十八世紀に於いて逆境に立ちしゼスウイト教の衰運は羅馬教界を根本的に動かさんとするものにして、其の結果や實に寒心すべき事に属す。されど佛蘭西の狂的共和主義に對して、又は改革的宗教國に對して反對に保守的主義(Conservatism)の鼓吹せらるゝものなきに非ず。されば、ゼスウイト教の恢復はいかになすべきか、又十九世紀に於ける反動的カソリック教(Reactionary Catholicism)は如何にあるべきかの問題は、その結果として生じ來たりし程なり。

紀元一七八〇年より向ふ十二年間にわたりて行はれしジョゼフが改革(Joseph's reform)は羅馬の宗教會議に制限を加へ、巡禮の舉行を禁じたるの外、虚無僧侶の廢止を唱へ、其の他、庵寺を變じて學校病院兵營などに宛てたるが如き點にありたり。

而して此の時より教會議式の用語として土語を以つてすることも認められたり。但しマス(Mass)の時は例外なりとす。かくてカソリック派(Catholicism)の中心に近きあたり、ヴェニス(Venice)の町はカソリック僧を排除せんとし、チーンプル

佛蘭西革命の  
原因の一つ

ス(Naples)の町は羅馬と從屬的關係を絶たんとす。以つて世運の傾向が那邊にあるかを察知し得べし。

かくの如き舊教に對する一般的反抗は是れ決して輕々視し去るべきものに非ざるなり。何となれば此の影響は引いて直接間接に佛蘭西の革命(The Revolution in France)に向つて多大の原因となり居ればなり。蓋し法王教權の放肆を制限し、貴族の專横を挫かんとするの精神は當時の佛蘭西に於ける時代思潮なりしなり。殊に教會領不動産(The landed estates of the Church)の節減はその聲を高め來たり、紀元一七九〇年八月には僧正の數を減じて教會の局(Department)と同一の數に定め、教會所屬の地方を制限し、且つ僧正其の他高級僧侶の選定は總代使節(Deputies)のそれと同様の方式によるべきことなどを命せしめんとし、紀元一七九〇年十一月更らにその命令の批准を要求しぬ。されど法王は之を拒みて應ぜざりき。

改革派と法王派とはかくの如くにし相反目常ならざりしが舊教に反對せるコンヴェンション(Convention)に屬するものなどは多く、法王を死刑に處すべく公

基督教の緩和

言するものさへあるに至れり。兩派の争はかの巴里の僧正ギョベト(Gobet, Bishop of Paris)などが紀元一七九三年の秋十一月コンヴェンションの會堂(Hall of Convent-ion)に於いて極力基督教を否認罵倒せし時に於いて最も激烈の頂點に達したり。苟も僧侶たるものはすべて牢屋に投せられ、又は流刑に處せられんとし而して、教會堂は勿論破壊又は焼き打ちの災に遇へり。

物極まれば又降るの習ひ、宗教に對する反抗の極は紀元一七九七年稍下火とならざるを得ざるに至れり。禮拜は再び認められ三十八人の僧正と五十三人の僧侶とは巴里に於いて宗教會議をひらき其の善後策を講せり。即ち此の會議に於いては貴族復舊に反抗を圖りては到底基督教の保安をはかり得べからざるものなりとの事を議したるものなり。然るに法王ピウス六世(Pius VI)は全然徹頭徹尾之に反對して頑強なる保守の態度に出でて之に従はざりき。

かくて羅馬は改革派の爲めに侵害を受け、法王は囚虜として佛蘭西の地に引致せられたり。而して紀元一七九九年法王ピウス六世(Pius VI)はヴァランス(Valence)の地に死しぬ。時にボナパルト(Bonaparte)はその兄弟に言つて曰はく

ボナパルト

ルーテル派の模倣

ピウス今や死す。又他の法王を任命することを嚴禁すと。十八世紀の末葉に於ける法王の末路は又實にかくの如き有様なりき。

羅馬教の衰運かくの如き趨勢なるに對して一方にかのルーテル新派(Lutheranism)は如何と云ふに、此の新派は丁抹、瑞典、諾威の地に於いてこそ榮ゆれ、其の本家の地たる獨逸に於ては反つて輓近に現はれ來たりし哲學(Philosophy)の爲めに攻撃を受けて其の方の爲めに其の影をかくしぬ。十八世紀の末期に於いて獨逸の基督教なるもの、中心は唯わづかに僧侶社會(Priests)に於いてのみ認められ、其の他一般には之を認めず。其の僧侶社會とは紀元一七二二年の頃チンゲンドルフ(Zingendorf)監督の下にありし仲間にしてジョンヌス(John Hus)の後を奉じ専ら布教と教育上の事業を成せるに於いて名あり。當時獨逸には又神學(Theology)と哲學(Philosophy)との調和をば神(Daity)によりて表はしたるライブニッツ(Leibnitz)あり。又之と正反對のロック(Locke)あり。或はウォルフ(Wolf)の如きデカルト(Descartes)の如きあり。デカルトの哲學はカント(Kant)によりて繼かれ、後フイヒテ(Fichte)及びヘーゲル(Hegel)によりて更に研究せら

獨逸に於ける哲學派



レンシング

れたり。又神學者としてはパウルス(Paulsen)及びセムラー(Semler)の如き代表的學者あり。又レンシング(Lessing)の如く實利主義の哲學者(Didactic Philosophy)あり。レンシングの如きは基督教も猶太教も亦モハメッド教 (Christianity, Judaism, and Mohmedanism)も共に同一視してこれ等は唯吾人の倫理的力と官能とを發達せしむる爲めに作られたる宗教に過ぎずとの見解を以つて宗教を視たり。

かくの如くにして十八世紀の末葉は獨逸に純粹なる宗教的基礎をはなれて哲學的思想の新派が興隆するに至れり。されば布教師教師などの聖書の講義其他此の如き種類のことに關して紀元一七九四年フレデリック・ウイリアム二世(Frederic William II)が詔勅の發布を見るに至りたり。

獨逸の宗教思想の大體はかくの如し。此時にあたりて他の諸邦を見る英國にてはスエデンホルグ(Swedenborg)の神秘説(Mysticism)の行はるゝあり。スコットランド(Scotland)には先きのカルヴァイン派の餘派の名残を見たり。然れども英國全體の上より云ふ時は英國の教會はかの女王アーン(Queen Anne)の爲めに非

英國教會の黄金時代

女王アーン

常なる恩典と奨励との恵に浴することを得たり。教會が豊かに且つ頗る有用視せらるゝに至りしも此の女王アーンの時代のこととに屬す。

英國教會文學の起りしも亦女王アーンの時代のこととなるが女王の名は宛かも獨逸に於けるフレデリック一世のそれの如く廣く頌せられたり。英國基督教會は英國人内部にて舊教とプロテスタント(Protestant)派のものとの調和をはからんと希望を有し居たり。然れども遂には舊教派の爲めに引かされ、假令法王は直接精神的の裁判權を主張せずと雖も而かも法王が基督教國の最高位置にあるものとのことは争ふ可からざるものにせられたり。(Du Pin's Letters Thirty-nine Articles)

英國の基督教は旭日の勢を以て隆盛の域に達したり。而してその間又基督教を以て實利主義に解して説をなすものを生ずるに至れり、又人々の罪惡を以て反つて國の福利(Welfare of the State)に必要なものなりとせり。此の派に屬するものにてアントニー・コリンズ(Anthony Collins)あり。次きの著作を有す。

一自由思想論(On Free Thinking.)

アントニー、コリンズ

二、基督教基礎論(On the Grounds of the Christian Religion)

コリンスの見解によれば基督教は唯魔術の如く、而して其の聖書(Scriptures)はその手品書の如きものなるが如く危険なる観方をなせり。此れ等の害は後佛蘭西に傳へられヴォルテール(Voltaire)ルソー(Rousseau)の如きはその影響を受けて聖書に對しても同様の見解を抱き居たりき。

哲學的攻察の時代を過ぎて次に現れたるは神教(Déism)なり。ドイツに於いては嘲笑的怪疑論(Scepticism)を取る。其の最も主なる代表者を擧ぐればユーム(Hume)ギボン(Gibbon)等となす。

宗教としては昏睡状態(Trahargic Condition)にありし當時の英國教會(English Church)はホアイト、フィールド(White field)及びウエズレー(Wesley)の説教によりて覺醒せられぬ。然れども其の結果は最も重大なる宗派となり分れ、今に以つて英國の宗教となれり。その主なるをメソヂスト派(Methodists)となす。

又英國教會のうちにはエヴァンゼリカルの一派(Evangelical Pieties)あり。英國教の教義にカルヴァイン派のメソヂスト(Calvinistic Methodists)を取りよせて關

メソヂスト派

エヴァンゼリ  
派

和したるものなり。エヴァンゼリ派の僧侶は説教を以つて布教の主要なる仕事と考へ聖書(Scriptures)を以つて説法上の具と考へ且つルーラル教義(Luther's doctrine)を以つて説教の根本的準據と視、而して禮拜式の如き形式上のことは之を重用視せざりき。

エヴァンゼリ派(Evangelical)の事業として茲に特筆すべきは日曜學校(Sunday Schools)を始めて開きしことこれなり。而して又基督教傳道會(The Church Missionary Society)宗教攻究會(Religious Tract society)聖書研究會(Bible Society)などの基礎を確立せしも亦此の派の功蹟に歸せざる可からず。此の派に屬する最も有名な人々を列擧すれば次の如し。

- 一、フレッチャー(Fletcher)      二、ウエン(Venn)
  - 三、トブラヂ(Topladly)      四、ベリッジ(Berridge)
  - 五、ハーヴェー(Hervey)      六、ニュートン(Newton)
  - 七、ロメイン(Romaine)      八、ローランド・ヒル(Rowland Hill)
- 即ちこれなり。

日曜學校

アメリカ僧正任命

ジョージ三世(George III)の御世に至り聖書研究の僧正は多く貴族の間より出づるに至れり。然るに此の貴族側のもとは多く教會の監督を無視し儀式を等閑視するの徒なりしかば古代教會の形式はやゝもすれば多大の注意を拂はれざるに至れり。英國の國家は之を其まゝに打ち棄つ可からざるものとして、その僧正を束縛したり。其の束縛の如何に激しかりしかは國家がアメリカの僧侶(American Churchmen)をして僧正の位置(An Episcopate)に就かしむることを久しきにわたりにて拒絶し居たりしを以つても察知せらるゝなり。即ち久しく之に僧正任命さへなかりき。されど合衆國の獨立して以來は之が規定組織を見るに至れり。(Not till the Independence of the United States was established, did the Americans secure an episcopal organization)。

又紀元一七八四年にはアメリカの候補者ドクトルシーベリ(Dr. Seabury)がスコットランド(Scotland)教會の諸僧正によりて任命せらるゝの模様となり。紀元一七八七年には議會の條令(Act of Parliament)によりて英國に於ける此の任命の難問題は除去せられたり。其に於いてラムベス(Lambeth)に於いて二人のアメ

リカの僧正(American bishops)を見るに至れり。紀元一七八九年にはアメリカ教會(American Church)の教典は定められ以つて今日のそれに至れり。

英國はハノーバー朝(Hanoverian dynasty)の基礎定まりてより宗教に對して溫和の主義をとり。紀元一七九一年英國に於ける羅馬の教徒は假令ひ政治上の權力は奪はれたりと雖も其の經濟上の收入に關しては一般國民と同様の取扱ひを受くることゝなれり。蓋し此の以前に於ける英國羅馬派の首領は既に法王が帝王を左右し又は政府を轉覆するが如き權能をふりまわすことを許さざることゝ規定し居たりしなり。爾來英國の帝權と教權とは明かなる區別を見るに至れり。

## 第十九章 第十九世紀に於ける基督教

ピウス七世

十九世紀の基督教史は法王ピウス七世(Pius VII)の佛蘭西に對する關係に始まる。始め紀元一八〇一年法王は佛蘭西のボナパルト(Bonaparte)と外交商議に入りぬ。その商議第一回(The First Consu)に於いて次ぎのことを認めたり。曰

はく、  
『宗教は倫理的行為の標準として世俗統治に頗る適切必要なるものなり』  
とのこと即ちこれなり。

ピアスは佛蘭西に對してたとひ如何なることを犠牲にするも如何にもして  
國に基督教(Christianity)を恢復せんことにつとめたり。當時或は無神教の教義  
(Atheist doctrines)を放棄するものあり。又異端邪教を賊するものあり。かく  
て革命(The Revolution)は法王の希望通りに行はれ法王派(Papal Concordat)の活動に  
よりにて改革は神聖視せらるゝに至れり。

法王は第一回の會議に於いて定められたる僧侶政治(Hierarchy)を認め而して  
佛蘭西宗教事件に關する諸種のこととは佛蘭西政府の批准なきものはすべて悉  
く之を拒絶したり。法王かくのごとき態度に出でたるに對してボナパルト  
(Bonaparte)もカソリック教(Catholic Faith)尊敬の念を起し官廳に日曜日の休日  
を勵行しツイレリー(Tuileries)に於いてマス(Mass)の儀式を行へり。

かくの如き佛蘭西の基督教復舊は諸外國より等しく歓迎せられたりき。

ナポレオン  
ボナパルト

紀元一八〇四年ナポレオン(Napoleon)は帝位に登りぬ。ナポレオンが巴里入  
京は殺伐たる光景を之に伴はざるを得ざりき。されど昔しシャールマン(Char-  
lemagne)が羅馬に於ける如き悲惨なるものにてはあらざりき。當時教職(Holy  
Sec)の位置を恢復せんとして三人の使節はローマニア(Romagna)に來りしに端  
なく佛蘭西の爲めに捕はれたり。ピアス爲めに大いにその位置に復せしめん  
ことを要求せしも其の甲斐なかりき。其の堅城とたのみしアンコナ(Ancone)の  
城砦は紀元一八〇五年オーストリアの戦争(Austria war)に際し佛軍の爲めに占  
領せられたり。法王ピアスは羅馬主宰者たることを争論せしもナポレオン  
(Napoleon)は之に對して頗る冷淡馬耳東風の有様なりき。されど流石のピアス  
も現世的のナポレオンを説いて自己の説を用ひしめるまでには至らざりき。  
唯ピアスはピアスとしての法王たる態度を守り居るのみなりき。かくて羅馬  
の町は佛蘭西人の手に歸しぬ。されどピアスは其のフランコ法王條約(Traite  
Papal League)の場合に於ける招待は斷然之を斥けて受けざりき。

かく法王ピアスはナポレオンに對して頑として従はず、反對の態度にあり

ピアスの入獄

しがばピナスは遂にフェキストレキ (Fenestelles) の國獄 (State prison) に投せられ羅馬は其の間自由放任の都市 (Free city) として公認せられ紀元一八〇九年羅馬は正式に佛蘭西の所屬とし見做されるに至れり。後紀元一八一三年ナポレオンが露西亞の Moscow に於いて苦境に陥り其の翌年一八一四年ナポレオンは大失敗を蒙りてフォンテンボー (Fontenoy) に囚虜となりし當時に於いてもピナス法王は依然斷乎として其の節を持し居たり。

佛蘭西皇帝ナポレオン没落後歐羅巴は保守主義 (Conservatism) を以つて風靡せられたり。紀元一八一五年神聖同盟 (Holy Alliance) を設立せし政府の方針によりて法王權は突然認めらるゝこととなり舊教保護確立の精神は今に以つて認められ殆んど常に間斷なく保たれたり。されば固よりピナス七世の如きも列國 (European powers) の好意と囑望とを以つて其の現世的法王領 (His temporal dominion) にまで復せしむることを得たり。かれは其の復活の年代を以つて紀念としてゼスウイット教徒の再興 (Re-establishment of the Jesuits) を斷行しぬ。

紀元一八〇六年神聖羅馬帝國 (The Holy Roman Empire) は滅亡しぬ。オースト

チャールス十世

レオ十二世

リア (Austria) は之を恢復せんと欲せず。又欲するも能はざりき。神聖羅馬帝國瓦解の後ハ獨逸聯邦 (Germanic Confederation) の勃興となり。以つて今日の北獨逸帝國 (North German Empire) の端緒は萌芽しぬ。而して諸侯の僧正 (Prince-Bishops) は次第にその跡を絶ちぬ。而してその都及び聯邦の分割は宗教上の嫉妬不和の事情を挟むことなくして各國の間に行はれたり。由來羅馬の人民にしてプロテスタン派の主宰者 (Protestant rulers) 側に投せしものは教育問題及び異族結婚問題 (Mixed marriage) などの争論に關してその論を益激烈ならしめたり。蓋し此れ等の問題は今も尙獨逸に於ける著名 (Conspicuous) の問題なり。

次に佛蘭西方面を見るに佛蘭西の教會 (French Church) は其の貧乏と不信用とを以て從來久しく悲境に在りしも今や比較的有望なる氣運に向へり。されど茲にゼスウイット (Jesuit) とガリック (Gallican) との二派の敵は再び蘇り來りぬ。紀元一八二八年チャールス十世 (Charles X) は衆人俗聲の輿論によりてゼスウイット大學 (Jesuit College) に迫りて之を攻撃すべく餘義なくされたる程なりき。

紀元一八二三年ピナス七世 (Pius VII) は死しぬ。次に立ちたる法王はレオ

十二世 (Leo XII) なり。レオ十二世は自由哲學 (Free Philosophy) バイブルンサイチー (Bible Society) 自由組合 (Freemason) などに對して反對を發布しぬ。かれはホルラント (Holland) と氣派を通じ同盟を結び紀元一八二四—五年ジュビリー (Jubilee) の祭祀を行ひ、陽曆中に新聖人を加へたり。

紀元一八二九年ピアス八世と云へる學者は時事問題たる當時の異族結婚問題 (Mixed Marriage Question) に就いて和解調和を得るべく種々苦心し居たり。次に立ちたる法王グレゴリ十六世 (Gregory XVI) は教義の至高を辯護しながら其の實主宰者としての普通の才幹をも全然有せず。いつしか羅馬に一揆を見るに至りぬ。その一揆は巴里に於いて列強 (Great Power) 集會の必要を生じ、遂に此の會議に於いて法王政治を認めしむることに決しぬ。されど法王及びその僧正は他の要求通りの政變をなすことは固辭したり。擾亂は又新たに加はりぬ。而してオーストリア (Austria) 及び佛蘭西の軍隊は紀元一八三八年まで法王領を占領し居たりき。

グレゴリ (Gregory) の外交事件は更らに又プロシヤ (Prussia) に於ける國事問題と

相聯關せり。フレデリック・ウキリアム四世 (Frederic William IV) は紀元一八四一年バヴアリア王 (King of Bavaria) によりて説伏せられ羅馬教徒 (Romanist Party) に妥協しぬ。後五年ピアス九世 (Pius IX) 法王の位に登りたり。新法王はつとめて暴君に真似て自由政治を行ひ成る可く風雲暗濛の機に至らんことを欲し居たり。

折しも紀元一八四八年佛蘭西革命 (French Revolution of 1848) の破裂するやピアス九世 (Pius IX) は一憲法を羅馬帝國の爲めに布きて而してゼスウイット教徒 (Jesuits) を放逐すべく強ひたりき。されど茲に種々の事情の起りし爲めかピアスは自ら遁れて微行の姿を以つてゲータ (Geta) の町に至りぬ。かくて八ヶ月間は羅馬は共和政府 (Republican Government) の下に立ちぬ。ピアスが紀元一八四九年佛蘭西保護の下に復せし時はかれは己に従來の反動的行動として教會政策 (Ecclesiastical policy) を取るに至らんとせり。

爾來ピアス九世は羅馬教職 (Roman See) の精神的興隆を主張してやまず。ナポレオン三世 (Napoleon III) がゼスウイットを復活せしめたる機に乗じピアスは法

王の精神的専制の問題をかつぎ出してその興隆を期せり。而してピアスはコンスタンヌ(Constance)の宗教會議の決議並びに羅馬諸僧正の説をなみして公言して曰へらく、教會の正義を守りて罪惡を犯すなきは教長法王の功に歸せざる可からず。The Church's infallibility was vested in her chief pastor the pope. 法王の此の〔見解は紀元一八六八年の回章(Cencyclie)に於いて表示せられたるなり。尙一八六九年より一八七〇年にかけてエカメニカル會議(Ecumenical Council)は之を更らに確むるために召集せられたり。僧正、僧侶の集り會するもの無慮七百六十四人。ヴァチカン(Vatican)の宗教會議は即ちこれなり。議題は、

『基督の説教について』De Foesia Christi.

なり。議論花を咲かせて紀元一八六九年冬十二月より翌一八七〇年七月に至るまで其の會は續きたり。此の宗教會議の結果はカソリック教徒(Catholic)の勝利となり、法王は同年同月十八日教權(Apostolic Authority)の名によりて之を確實ならしめたり。

次に佛蘭西方面に就いて云ふに、佛蘭西の福音事業は紀元一八七一年の帝

ヴァチカンの會議

マック、オ活

權没落以後一新局面を開きたり。蓋しその功はマック、オール夫妻(Mr. and Mrs. Mc All)の盡力に俟ちたるもの實に多し。マックの福音傳道の活動は尙多くの之が補助應援を得たり。爲めに布教説教の功蹟も頗る迅速にして且つ大々の規模を以つて進捗したり。かくて各方面にわたりて其の運動は擴張せられたり。

伊太利西班牙方面に於いてはプロテスタント(Protestant)布教の努力が方法を盡して多くの宗教活動を始めたり。かのアメリカ教會(American Church)にてすらも羅馬ヴェニス(Venice)ボローニア(Bologna)ネーブルス(Naples)ミラン(Milan)其の他の諸地方にて活動するに至れり。基督禮拜の如何は伊太利王國全體到るところ自由なりき。殊にプロテスタン新派は隆盛にして、その教會を設け學校を立てたるなど年々歳々その勢はいや増しに増すの有様なりき。スペインは一八七一年イサベラ女王(Queen Isabella)遁亡以來今に以つてプロテスタント派なるが、獨逸教會布教師は之が率先者として、西班牙の爲めに或は新教々義を啓導し或は日曜學校(Sunday-Schools)を立て、或は宗教文學を版にし又普及することにつ

伊太利及西班牙

とめたり。かくして、西班牙に國教としてこの新教の確立せらるゝに至りしことは茲に注意すべき現象なりとす。

獨逸  
獨逸の基督教はヘッケル(Haeckel)及び其の學派の怪疑哲學によりて頗る學者間の宗教心に影響を與へたりき。獨逸の或る地方に於いては尙舊教派の残れるものあり。その政治的理由よりして法王に同情を起し又は國のローマン・カソリック教(Roman Catholic)に加擔するものは悉く新教徒の僧侶即ちプロテスタント僧(Protestant clergy)の叱りを招きたりき。

瑞西  
瑞西は小國なりと雖も他の歐洲諸國と同じく其の宗教界は諸種の争ひと分派を有せり。東部即ち獨逸に近き方面にては有名なるベースル大學(University of Basel)あり。オーヘリ(Orelli)一派の神學者之に居る。西部即ち佛蘭西に近き方面はベルン(Berne)より來れる神學者が根據たり。かくして瑞西國は獨逸佛蘭西の兩國より共に著しき影響を蒙り居たり。

和蘭陀  
和蘭陀(Holland)は當時その教界頗る平穩無事なりしが和蘭陀神學(Dutch theology)の學派が福音派(Evangelical)と合理派(Rationalistic)との二派に分れてより其

の間に争闘を見るにいたれり。此の争闘の張本人はドクトル、グイヘル(Doctor Kuyper)にして、かれが主張するところは次ぎの如し。即ち和蘭陀の國教は合理主義(Rationalism)ならざる可からず。基督教義は之を復活せしめざる様妨止せざる可からずとまで極言したり。然るに反對派の正教派(Orthodox)の方に於ては其の名聲赫たるチャンピオン(Champion)を失ひぬ。ウトレヒト大學(University of Utrecht)のドクトル、ヴァン、オーステルゼー(Dr. Van Oosterzee)即ちこれなり。蓋しオーステルゼーは和蘭陀教會(Dutch Church)中最も才幹あり且つ最も雄辯なる布教師なりき。其の他クエチン(Kuening)あり。クエチンは怪疑派の神學者(Sceptical theologian)に屬す。かくて和蘭陀には最早や素との根本的獨立の神學者は其の跡を絶ち、唯獨逸派の哲學的臭味を帶べるものゝみとなるに至れり。

スカンデナヴィア半島(Scandinavian Peninsula)の國々に於いては精神界が當時激變に遇ひ根本的改革を見たり。即ちノールエー(Norway)に於いては其の教會と國家とは全然別體にして相わかれたりしが、スエデン(Sweden)に於ては其の間頗る注目すべき必要なる交渉が見られたりき。即ち瑞典に於いてはパプチ

スカンデナヴィア



スト(Baptist)にメソヂスト(Methodist)の兩教會の入り來たるもの非常に多く、而して瑞典に於ける最も名望あり、且つ最も感化力多き布教師はワルデンストルム(Waldensform)なりき。此のワルデンストルムの教會派は隱然勢力を得て國內到處殆んど此れが教會組織を見ざるものなきに至れり。その教徒を稱してワルデンストルミアン(Waldensian)と云ふ。而してかれ等が目的とするところは國教的政策をめぐらさんとするには非ずして唯精神的の一大團結をば空理にはせず着實に組織せんとせしものありたりき。

以上は歐洲大陸についての大體の觀察なり。次ぎには英國に於ける宗教の模様如何にありしか又宗教に關係して文學が如何なる色を帯ぶに至りしかについて少しく述ぶるところあらんとす。

歐洲大陸に於ける自由新思想の影響は宛かも佛蘭西革命のその如く英國の社會には蔽ふ可からざる事實として現はれ此の十九世紀の始めに於ける文學の上に最も明白に知られたり。

ロード、バイロン(Lord Byron)の如きはその代表者の一人なり。バイロンはか

英國の文學と  
宗教

ロード、バイ  
ロン

れが早年の傑作『無爲徒然艸』(Hours of Idleness)を草せしを始めとしてかれは豊かなる材料と充分なる活力とを以つて文筆をつゞけ、近世文學史上たしかに異彩を放てり。

セリ(Shelley)の詩は同時代に表はれたり。よし其の形式に於いては似たるところあるにせよ、詩の趣きに於いてこの間非常なる徑庭を有せり。バイロンの歴史的沈痛なるに反しセリは文致放肆なる趣きあり。されどセリ一派の文學は後の英文學(Later English Literature)に向つて多大の厭世的(Pessimistic)並びに怪疑的(Sceptical)の色を帯ばしむるに與つて力ありしものなり。吾人は敢へて之を多とせず。尙サウジ(Scott)は華美を主とせざる文學者なるも、かれは國教に對して全然忠實なる筆をとり、又保守派(Conservative)の一人なりき。かれに二著あり。

一、ネルソン傳(Life of Nelson)

二、ウエズレー傳(Life of Wesley)

此のうち後者は宗教改革の臭味を以てかゝれたる興味ある傳記なりとす。

セリ

ウォールト、  
ウォース

其の他基督教史上に表れたる文學者としてはウイリアム、ウォールドウォース (William Wordsworth) あり。ウォールド、ウォースの基督教 (Christian Truth) に對する信仰及び英國史上に於ける基督教の位置などに就いての見解は大いに見えるべきものあり。その著に次ぎの如きものあり。

『教會の歌』(Ecclesiastical Sonnets)

アーノルド

マッシュユー、アーノールド (Matthew Arnold) は半ば詩家にして半ば神學者たるところあり。されどかれが詩文は神學、聖書などに筆を及ぼさざる時に限りて反つて燦爛たる光輝あり。此の外當時の文學者にして指を屈すべきものあまたあれども、其の宗教史上に特に云ふ可きものはあらざるが如し。

歐洲以外の基督教

以上は主として歐洲に於ける基督教の現象なるが次ぎには、歐洲以外に於いて當時基督教が如何なる布教を有し居たるかに就いて其の大要を述べんとす。

プロテスタント

歐洲以外の布教は新教プロテスタント (Protestant) の經營にかゝるものにしてその布教の分布範圍又實にひろし。唯に第十九世紀に於いて始めて之れを見るに非ずして、既に十七世紀の當時に於いて之を見たり。左にその一例を述べ

アメリカ印度  
人の布教

んに、

紀元一六一二年にはレイデン地方 (Leyden) の布教あり、同じく、一六三六年には印度の蘭錫 (Ceylon) 島の布教あり。其の後爪哇 (Java) 阿非利加 (Africa) 其の他の地方の布教あり。第十八世紀の初年 (一七〇一) にはアメリカ殖民地 (America colonies) の印度人に對して福音傳道會 (The Society for the Propagation of the Gospel) が英國に設立せられたり。超えて紀元一七〇六年には丁抹王フレデリック四世 (Frederic IV) がチーゲンバルグ (Ziegenhals) 等をやりて南部印度 (Southern India) に布教せしめたることあり。紀元一七二一年にはグリーンランド島 (Greenland) に於ける丁抹人の布教あり。此の布教は總べて功を奏しぬ。

かくの如くして新教 (Protestant Churches) の布教傳道會は盛に起りたり。その最も盛なりし時は第十八世紀の末葉より第十九世紀の初期にかけての間なり。殊に紀元一八三〇年の年には歐米に於ける傳道布教の會は約二十にあまりて設立せられたりと云ふ。

布教の最大舞臺は印度なりとす。十八世紀に於ける印度の布教は甚だ稱々

印度の布教

としてはかどらざりしが十九世紀に入りてより着々その功を奏しぬ。一七九三年にカルカッタ(Calcutta)に上陸せしカレー(Carey)の如きは其の印度の土語の自習に殆んどすべての精力をそゞぎ一八三四年かれの死の漸く前にその聖書の翻譯をなしたり。

新教の印度布教史上紀元一八七八年は最も注意すべき年にして此の年には無慮六萬の信徒を得、今やビルマ(Burma)セイロン(Ceylon)を除き印度に於いて七百九十一個所の布教所十三萬七千五百〇四人の僧侶四十四萬九千七百五十五人の信者を茲に見ることを得たり。

支那の布教

支那に於ける最初の新教布教は英國のドクトル、モリソン (Dr. Morrison) にしてかれが支那に渡りしは紀元一八〇七年の年なりしが、其の後十四年間の苦心の末支那語辭典(Chinese Dictionary)を作り、聖書の支那譯を完成したり。されど此れ等の著作は五ヶ所の開港場が布教師に公開されたる年(一八四四)までは公けにせられざりき。

必要なる布教場は支那海岸線の全線を沿ふて又は大河の流域に沿ふて其の

岸邊に設けられたり。而してその分布は漸次支那内地西方地方にひろがり行き印度より漸次東方に來たれるそれと合せんとするに至れり。支那の布教は歐羅巴及び亞米利加兩方の新教徒の布教にかゝるものにして、當時の會堂の數三十七、外國宣教師八百八十九人、支那の牧師百三十四人、信徒二萬八千百十九人の多きを致したり。

紀元一八九一年及び一八九五年に於いては支那人が殆んど狂氣の如き排外熱の爲め現王朝(Present dynasty)をすら政治的に阻害せんと欲して外國人の教會堂を破壊し宣教師を虐殺せし位のこととは珍らしからぬことなりき。

ビルマ地方

ビルマ(Burma)方面に於いては米人ジドソン(Judson)と云へる宣教師の布教を以つて最となす。十九世紀全般にわたりビルマ教會の基督教徒團體は全世界各地方布教中最も確實なるもの、一つとなれり。

日本の基督教

日本に於ける基督教の布教はこれ亦世界に於ける最も有望なるもの、一つなり。紀元一八五四年米人ペリリ(Perry)が始めて日本を覺醒して西方の科學智識に接せしむるの基を開きてより茲に日本と新教基督教の接續は其の緒を

開きの。紀元一八五四年英國のロンドン傳道會(London Missionary Society)と米國の或る教會とは先づ始め其の布教の活動を始めぬ。されど紀元一八七三年基督教嚴禁の令(anti-Christian Edict)の解かれし年即ち一八七三年まではその功を見ること少なかりき。今や此の日本の全島は新教、ギリキ(Greek)羅馬(Roman)派の教會を見るに至れり。紀元一八七七年にはプレスビテリアン(Presbyterian)及びリフォーメド(Reformed)教會の組合教會(Union Church of Christ)を形成せるあり。されど未だメソヂスト派(Methodist)の總べてのものを連合せしむるの協議は充分の功を奏す能はざりき。

紀元一八九〇年には日本は信教自由の一新法令の布かれて茲に始めて基督教(Christianity)の如きも正統なる國の宗教の一つに認めらるゝに至れり。紀元一八九一年に於ける日本の基督教の概況は次ぎの如し。

- 1. Missionary Societies..... 18
- I. Missionaries..... 403
- 3. Native converts ..... 32,380

朝鮮

朝鮮に於いても亦布教は及びぬ。而して茲には唯當時濟生的の病院と教育方面の事業のみが認められたるのみなりき。然れども近時の信徒は著しく増加し新舊兩派を合して八萬三千人に達す其のうち五萬六千はカソリック教徒なり。

西部亞細亞

以上は東方亞細亞の大要なり。次ぎに西部亞細亞について見るに、西方にて布教の中心たりしことはシリア(Syria)地方なりとす。茲には米人の新教宣教師ドクトル、ブリス(Rev. Dr. Bliss)の監督の下に宗教大學まで設けられたり。又いつて布教の程度の一斑を知るに足る。新教徒は地方の反抗ありしにも係らず或は町に或は村に倦まず布教に就事し數多の學校を設け、聖書を普及し、宗教文學をひろむるにつとめたり。かくして漸次土人を基督教化したり。其の始めの宣教師をレヴィ、パルソン(Levi-Parson)と云ふ。その他

- ウイリアム、グッデル(William Goodell)
- エリスミス(Eli Smith)

あり。何れもゼルサレム(Jerusalem)、シリア(Syria)地方の布教につとめて其の名

シリア及び  
ルサレム

たかし。今のドクトル・ブルリス (Dr. Byrd) 氏はバレスチンに於ける教會 (Church Missionary Society) に反對して希臘教會 (Greek Church) を立てたり。一八九二年以來かれは又聖地 (Holy Land) の主要地に於いてあまたの有望なる教會を立て、盛に活動せり。

土耳其

土耳其の布教はコンスタンチノーブル (Constantinople) をその中心とす。そのブルガリア (Bulgaria) 地方は傳道に最も困難を感じたるところなりき。十四世紀の末葉より十九世紀(一八七八年)に至るまでブルガリアは土耳其の領地なりしが近來其の羈絆を脱して別に國をなすに至り又信教に向つても敢へて土耳其の制肘を受けざることゝなれり。ダニューブ (Danube) の流域及びボハフオラス (Bosphorus) の沿海方面には米國の布教師着々その功を奏し兼ねて學術的方面にも入り、ロバート大學 (Robert College) の設立をさへ見るに至れり。

阿非利加地方

モラヴィア (Moravia) の宣教師は又多く暗黒方面の大陸に先づ布教の手をつけたり。即ち紀元一七三六年には先づ阿非利加の西岸地方に、次いで南部阿非利加にその布教を始めぬ。又メソヂスト派のもの (Methodist Episcopal Church) はリベ

メソヂスト

リア地方 (Liberia) に教會を建てぬ。メルウイニ・ビョックタス (Melville. B. Cox) は阿非利加宣教師中最も早くその教に瘡れたるものにしてかれが紀元一八三三年赴任以後僅かに四ヶ月にして風土病に冒されて病死しぬ。

英國のウエズレー、メソヂスト教會 (Wesley Methodist Church) は其の阿非利加に渡れる宣教師のかず數百名の上に上り居たりしを以つて、その名よく知られたり (Martyr Church of Africa) の名に於いて知られ居たるなり。

アレスビテリ

阿米利加の聯合プレスビテリアン基督教會 (American United Presbyterian Church) は阿非利加の北部地方の布教に従ひ今のカイロ (Cairo) の地を以つて其の中心點としたり。ドクトル・ランシング (Rev. Dr. Lansing) はその布教に最も功多くナイル (The Nile) 河附近の布教カイロ地方の學校設立は主としてかれの功蹟によるものなり。カイロに於ける學校教育には尙故ホエートリ (The late Miss. M. L. Whatley) の功亦少なしとせざるなり。

リベリア

中央阿非利加方面に於いて其の文化の輸入と福音の傳道とに與つて力あり且つ爲めに世界の全新教國の耳目をして聳動せしめたるものはかの有名なる

リビングストーン(Living Stone)なりとす。かれがその献身的事業は古來基督教布教史上稀に見るところのもの而かもかれが世界の大探險家として又第一流に位する所以のもの吾人は茲に多大の注意を以つて之を考察せざる可からざるなり。リビングストーンの義父コバートモファット(Robert Moffat)は已に紀元一八二〇年の頃ベクアナ(Bechuanaland)の蠻地に入りて福音を未開人に傳へし經歷を有せし人なり。此の親にして此の子あるなり。

白耳義(Belgium)の王レオポールド(Leopold)の建てたるコンゴト自由國(Congo Free State)は始めヘンリメタンレー(Henry M. Stanley)の驚く可き冒険を以つて遂に之を見るに至りしものなるが此の地方に於ける基督教の布教はウィリアム、テラー(Rav. William Taylor)の功蹟に歸せざる可からず。テラーはメソヂスト派(Methodist Episcopal Church)の宣教師にしてコンゴ河(The Congo)の流域より此の國の全谷地(The whole valley)に福音を傳へんとしたり。かれが燃ゆるが如き熱心はその布教の着々功蹟を見るに至りぬ。蓋しかれば此の地の事業に先ち已にカリフォルニア(California)に於いて又オーストリア(Australia)に於いて又

コンゴト自由國

印度に於て南部阿非利加に於いて充分の布教上の經驗を有す。此の經驗を以つて今や新にコンゴ蠻人の布教に従事するに至りしもの、その功蹟を擧ぐる又偶然に非ざるなり。

吾人は近世の世界基督教傳播をかくの如く通覽す。尙此のうちにはマダガスカル(Madagascar) 爪哇(Sandwich Islands)及び南洋諸島(South Sea Islands)のことは云はざりしもこれ等も亦多大の困難にて辛ふしてそれぞれ布教に近づきつゝあり。總じて野蠻未開地を化するには先づ言語を解し得ることを以つて必要となす。然れどもその多くは未だ文字を有せず。されば布教に就事するものは先づ蠻人の言語を書き得べき文字によらざる可からず。多くは羅馬字を以つてその發音をうつして其の語をつづる。かくして聖書は諸地方の語に翻譯さるゝなり

基督教の傳播に伴ひ自ら生じ來たる學問は上にも述べたる如き言語の研究を始め其の他文學(Literature) 人種學(Ethnology) 植物學(Botany)の如きもの研究の端緒を見るに至れり。かくて新領土は漸次吾人の智識内に入り、新部落新民族

大洋諸島

基督教化の

摘要

は漸次文化の風に化せられ殘忍野蠻の風俗もいつしか法律と秩序とを見るに至り茲に平和の君の下に統治せらるこれ一般開明に向ふの順序なり。

以上基督教史を通覽するに其の布教は非常なる困難にあひ多大の妨害を蒙り殆ど教化の望みなきが如き失敗の上に失敗を重ねること、是れ布教の歴史上常に見るところなるが吾人は基督教がかくの如き苦境を凌ぎに凌ぎて而かも布教事業(Missionary enterprise)の近世史上に於ける成功は實に驚くべきもの有るを見るなり。又以つて基督教義と及び布教師の堅忍不拔の精神を顧みて大いに尊重するところなかる可からざるなり。

基督教史終

←(製並史教督基)←

明治四十二年三月十五日發行  
 明治四十二年三月十五日發行

定價金四拾錢

著作  
 所有

著者 藤谷深勵

發行者 大橋新太郎

印刷者 市川七作

印刷所 博文館印刷所

發兌元

東京市日本橋區本町三丁目

博文館









42192

豫言者 宮崎虎之助 著

# 基督觀

全一冊洋裝菊判美本  
紙版二百五十六頁  
正價金四拾錢  
郵税金六錢

## 序論

## 基督觀(一)

## 基督觀(二)

## 基督觀(三)

## 基督觀(四)

## 基督觀(五)

## 基督觀(六)

## 基督觀(七)

## 基督觀(八)

## 基督觀(九)

## 結論

基督の信念の意識  
基督の信念の後に於て

豫言は何故に出現したるか。○世界に於ける大日本。○大日本に於ける豫言者。○豫言者の咆哮。○神の國即ち天國の由來。○パプテスマのヨハネ。○ヨハネに於けるエッセイ。○基督に於けるヨハネ(上)。

ヨハネに於けるイザヤ。○ヨハネの天國觀。○基督に於けるヨハネ(下)。

基督は如何にして覺醒したるか。○カリライヤ湖と基督。○カリライヤ人と基督。

基督の家庭如何。○基督の煩悶と大悟。○天國建設に對するヨハネの自覺と基督の自覺。

基督の宗教革命の主義。○舊約史上に成長したる天父の觀念。○基督の性情の發達及び經過。○ラキの豫言。○基督の性情の發達及び經過。○ラキの豫言。○基督の性情の發達及び經過。

基督の自覺は如何にして來りしか。○幽遠なるマヒラの理想。○崇高なるモーセの意識。○基督の發展の傾向及び歴史上必至の啓發。

教育者たる基督。○説教者たる基督。○偉人基督。○煩悶の基督。○信仰の基督。○白聖の基督。○メシヤ實現の基督(上)。○煩悶解決に於ける基督評論。○メシヤ實現の基督(下)。○基督の信念の缺陷及評論。

基督の眞相果して如何(上)。○基督の天國觀及天國の歸趣。○基督の眞相果して如何(下)。○豫言者心算の眞生命。

# 高僧の人格

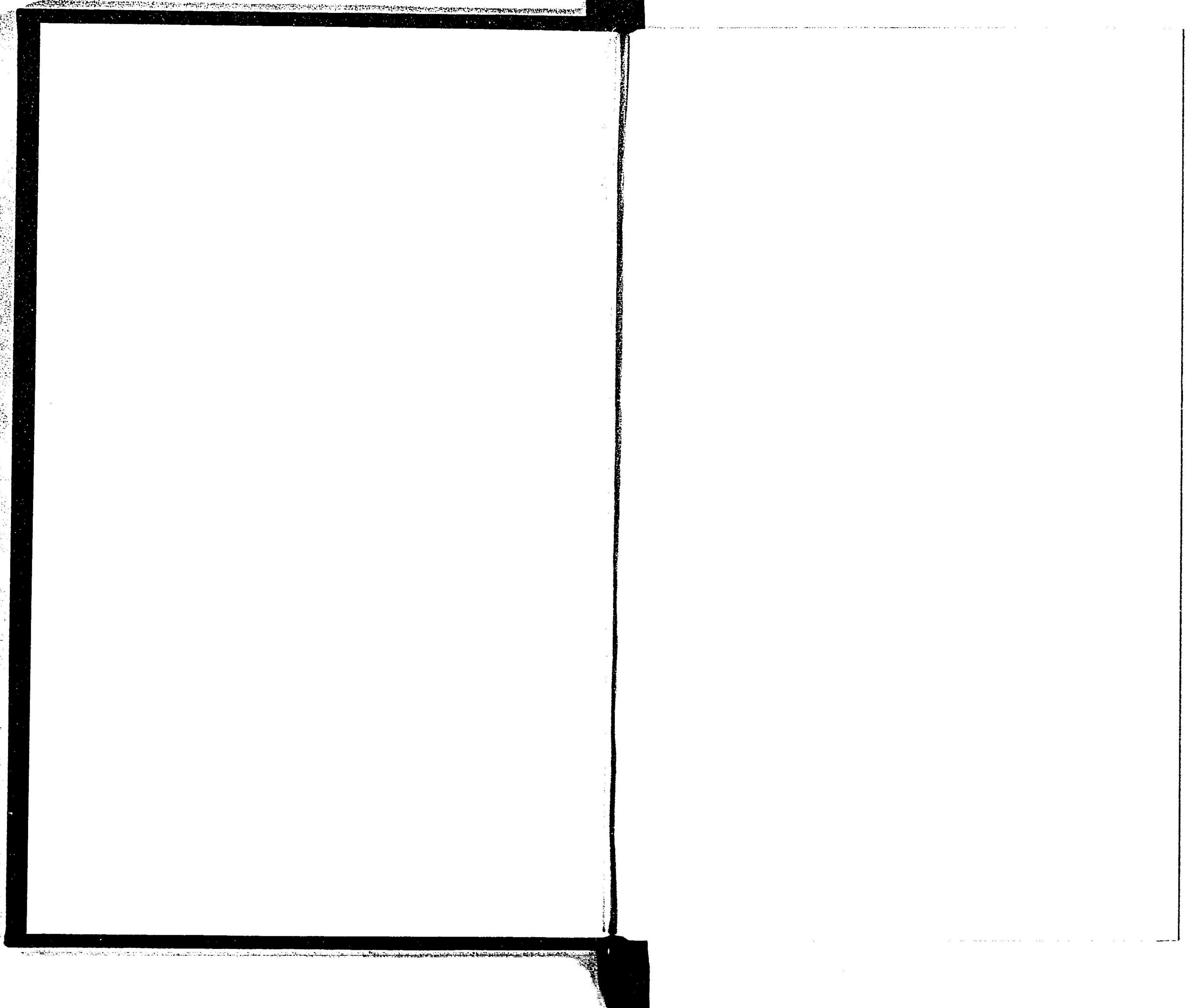
文學士 蜷川龍夫君 著

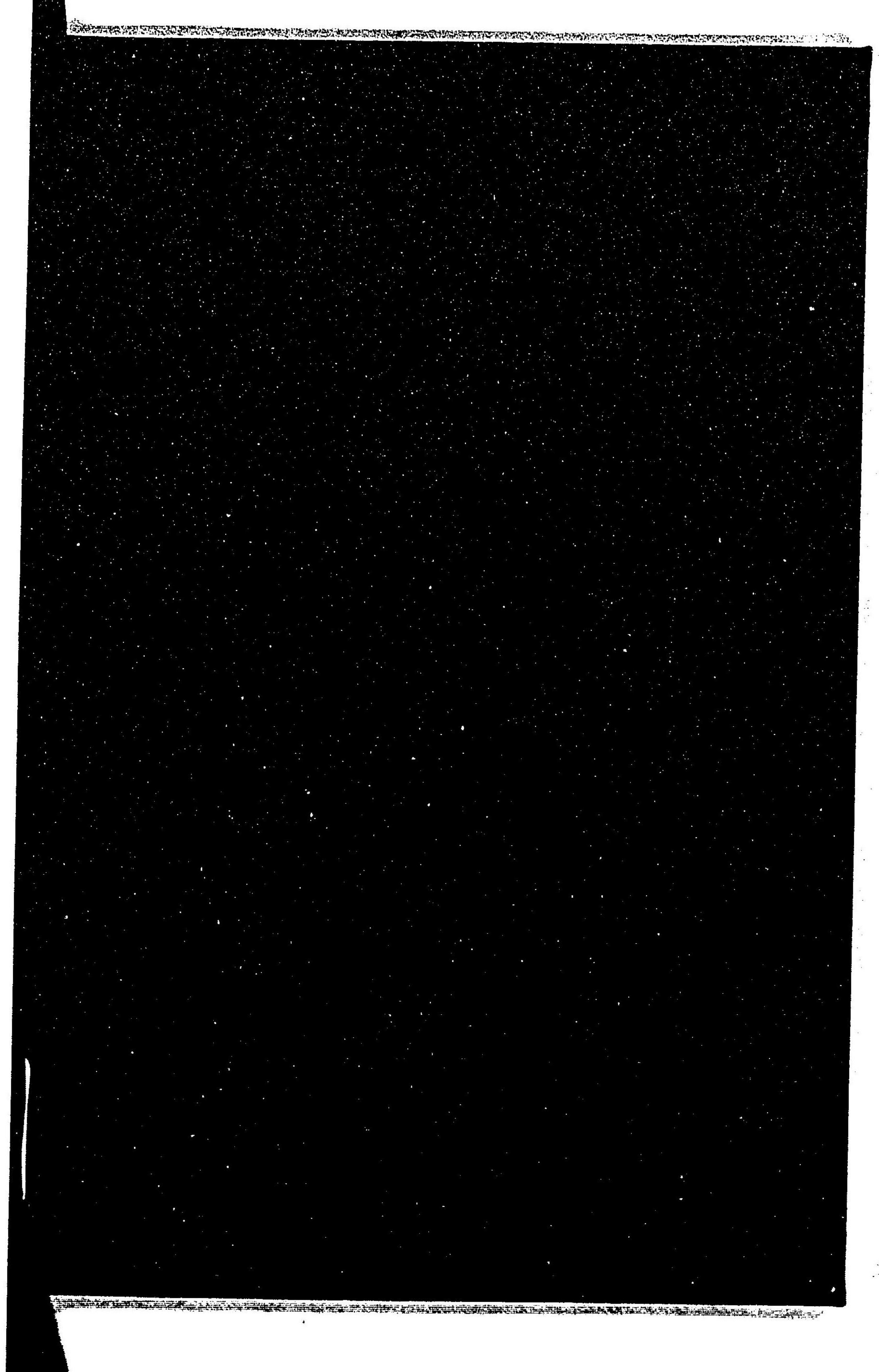
博文館發行

活ける信念に渴し修養の奥秘を求むるの聲や天下に治く其のこれを求むるや唯た理論的説明のみを以て足れりとせず短刀直入靈界偉人の胸臆を叩いて活ける光明と新しき生命に接せんとす然れども慄むらくは我が邦建國以來國民の精神界を支配陶治し來りし佛教の祖師高僧聖人の傳記叙述は概ね靈怪の假裝を被り奇蹟性神秘的口吻を以て飾られ未だ正確なる史的考察に基きてその精神生活とその人格の至大とを仰視せしむるに足るものなきが如し本書は著者獨特の史的洞眼と多年研鑽の歸結とを以て我が佛教史上第一流に任すべき二十有餘の祖師聖人を我が民族思想史上の大立物となし主として其人格の特色と各個獨創の修養法を詳述し且つその時勢と四圍との關係を詳論し次で精神生活の状態を最も詳密に最も平易に發揮したるものにして一讀古聖人の精神修養の心術と人物養成の秘訣とを窺知するに足るものあり蓋し本書に依りて我思想界多年間の渴望を満すものあらん

全一冊洋裝菊判紙數二百四十頁  
正價金四拾錢 郵税金六錢







78  
3

020449-000-7

78-3

基督教史

藤谷 深励/著

M42

ABI-0259



